

第3回全国路地サミット 大久保路地園芸探検 報告書

平成17年10月8日

全国路地のまち連絡協議会
路地園芸推進プロジェクト

はじめに

）今年から始まった、路地園芸推進プロジェクト。その活動第1弾として、全国路地のまち連絡協議会会員による路地園芸探検を東京都新宿区の大久保駅周辺地区において、9月10日に24名の参加を得て実施した。

）この路地園芸探検は、地域ごとに取り組む園芸のスキルアップなどの事業ではなく、とりあえず東京の路地園芸の実態を会員が把握しようというものであり、おもしろいものを見つけてまとめ、あわよくばまち歩き雑誌や東京をテーマにした雑誌などに売ってしまおうというものである。東京23区を毎年1区ずつ選んで歩いていこうという壮大な計画であるが、会員の平均年齢はご多分に漏れず高く、それまでテンションが続くか、あるいは全国路地のまち連絡協議会が存続しているかは定かではない。

その第1弾として、会員1名在住、1名在勤のまち東京都新宿区「大久保地区」に白羽の立ったわけであるが、在勤会員の「ここはおもしろい、特にファッションホテルの入口がおもしろい、犬も食える」という強硬なる推薦に従い、最近話題の多国籍なまちを見ようというスケベ心も加わって、決まった。

）この報告書は、一応報告書という体裁になっているが、基本的には参加者の探検結果を合本しただけのものであり、学術的な価値や客観的な分析については責任は持てない。このため、読者から「内容が不適切である」「偏見に満ちている」あるいは「報告書として支離滅裂である」などの指摘を受けることは十分考えられるが、記述内容については執筆者個人の責任に帰するもので、編集者（編集しているとは言えないが）としては責任を持てないことを申し上げておく。

）なお、今回は、全国路地のまち連絡協議会会員7名（内1名は探検後に強制入会）、NPO日本都市計画家協会会員5名、その他3名、東京シティガイドクラブ自然探索グループから9名の参加となった。東京シティガイドクラブ自然探索グループには、まったく路地やまちづくりと関わりのない団体であるのに、当会会員を上回る参加を得て恐縮するとともに、大変感謝する次第である。また、(株)グリーンダイナミクスの賀来氏（当会会員）及び河合氏には、専門的なお話をいただき、園芸に関して浅薄なる知識しか持ち合わせない会員をご指導いただき心より感謝します。

平成17年10月8日

第3回全国路地サミット

全国路地のまち連絡協議会事務局



も く じ

はじめに

大久保の路地と緑が生む共生文化に期待

） 司波 寛 ） ） 1

路地の「記憶」「生活」を継承し、「生活の糧」を得て生き延びる可能性

） 遠藤 広正 ） ） 2

大久保路地園芸の観察

） 今井 晴彦 ） ） 4

新宿区大久保路地園芸探検レポート

） 荒木 良一 ） ） 5

大久保探検レポート

） 賀来 宏和 ） ） 6

大久保路地園芸探検 ～しつらえか？個のにじみ出しか？～

） 木村 晃郁 ） ） 8

大久保路地園芸写真マトリックス） ） 1 2

大久保路地園芸 おまけ） ） 1 4

大久保は江戸時代は伊賀の百人組に幕府から与えられた組屋敷からはじまる。今の久保通りと職安通りに面して屋敷地が縄張りされ、屋敷地に挟まれた土地は畑地であった。幕末には、躑躅が栽培され、下級武士の家計を助けていた。明治に入り、屋敷地裏側の畑地は突っ込み道路を入れて徐々に宅地化されてゆくが、大正初期までは躑躅の開花期には大勢の来訪者があったようである。

現在の久保の街はきわめて多彩である。思いつくままに挙げてみると以下の通り。①外国人が多数居住、②多彩なエスニック料理屋、③多い宗教施設、④連れ込み宿群、⑤多様な専門学校、⑥生活を支える小売店群、⑦多数の楽器店、⑧ピンキリの住宅、⑨外国人OKの不動産仲介業、⑩大小の医療施設、⑪小型の事務所ビル、等々。挙げ始めると切りがない。格好よく表現すれば、国際的多機能文化都市である。

こうした多彩な都市機能、都市活動を支えているのが、久保駅と新久保駅、そしてアミダ籤のような配置の細い路地である。車が入りにくい都市構造なので、通過交通はほぼゼロだろう。また、月極め駐車場はあるが、居住世帯が全部車を持つことなど不可能で、おそらく車の保有率は東京の平均よりもかなり少ないのではないかと。物流は車に頼らざるを得ないが、これだけの小売業、飲食業がある割りにトラック交通は少ない。かくして、鉄道駅が近いことと車の入りにくい路地を主要インフラとした街は見事に歩行者を主人公にした街をつくりあげた。

緑は街にゆとりと潤いをつくるといわれるが、この街は緑が多い。この最大の理由として、建物と建物の間、道路と建物の間にかなりのすき間があり、人々がこのすき間をひたすら緑で埋めてきたという営みの累積結果と考えられる。かろうじて残存している戸建庭付き住宅の庭からはみ出ている樹木がこれにアクセントをつけている。

部分部分の緑のあり様をつぶさに観察するのも面白い。5階建てにマンションの屋上を見上げると紙袋に包まれた葡萄の房が見えた。感心して見上げていると、そのマンションの真向かいの一杯飲み屋のオヤジが、「お向かいさんからもらった葡萄だ」と言ってよく冷えたのを一房くれた。大小様々な粒、紫に熟した粒、熟しきれず浅黄色の粒、とても商品になる代物ではないが、食べてみると旨い。

この街の将来をどうするか。おそらく、外国人との混住の最先端を走っている街だが、これをさらに進めて、この街の人々が共住できるコミュニティが構築されるかどうか最大の課題だろう。こうした人々の交流を促進するようなまちづくりはどうしたら良いのか。都市の装置というハード面で言うならば、車の入りにくい路地と緑の保全育成がキーワードになるだろう。

路地の「記憶」「生活」を継承し、「生活の糧」を得て生き延びる可能性

遠藤 広正) (日本大学大学院)

1. 2005年9月10日現地踏査の目的

「今日、都内の「住宅地」においては、地域の文脈を無視し、地域住民によって永続的に営まれてきた今までの「記憶」「生活」を破壊するような開発が散見される。

「一方で、「商業地（とくに、地域の近隣商店街）」に目を向けると、本来は近隣商店街が得意としてきた「生鮮3品」部門において、顧客が大手商業者（いわゆるチェーン店）へ流出し、衰退が深刻化している近隣商店街も場所によっては存在する。そのような商店街においては街路景観の修景と同時並行して「安い原価で（地域内から）仕入れたものに対して、高い付加価値を加えて（地域外へ）売る」という、商売の「基本」の部分からの再構築を望む「熱い声」が、商店主から上がっている（東京商工会議所およびNPO日本都市計画家協会「商店街における美しいまちづくり」評価プログラム2005年9月8日墨田区業平橋地区フィールドワークにて、現地商店主より聞き取り）。

ところで、不動産鑑定業（三友）の井上明義氏（「土地の値段はこう決まる」pp.20-22 朝日新聞社2005年）によると、地価上昇メカニズムには「①消費需要の伸びによる需給バランスの改善」「②大型投資による地域構造変化」の2パターンがあり、とくに後者②は「（地価上昇の）範囲が限定されるうえに一過性のものになりかねない」と評している。

井上氏の理論に則るならば、路地や近隣商店街の「生活」「記憶」を破壊してまで海外の投資ファンドに買い漁らせるような大規模開発よりも、むしろ安価な投資で小規模修繕しながら路地（路地遊び）の魅力や地域を代表する商品を宣伝した方が、「上がり」は遅いが永続的な資産価値創造に結びつき、ひいては住民がその土地で「生活の糧」を得て生き延び、永続的に営まれてきた「記憶」「生活」を継承して住み続けるために必要なのではないかという仮説が導き出せる。

そこで、本踏査では、路地の「魅力」や「地場商品」を発見し、ひいては住民がその土地で「生活の糧」を得て生き延び、永続的に営まれてきた「記憶」「生活」を継承して住み続けるヒントを得るための写真記録を主体とする。

2. 建物は替わるが、植物は残る



図 1) 更新された路地建築の傍らに生き残る過去を引き継いだ樹木

3. 「新宿区大久保発」の地場産品を発見



図 2) 路地建築物に巻き付く商品化の可能性を有する果樹

4. 現地踏査で得られた知見・導いた仮説と、「まちづくり」分野における本現地踏査および路地研の位置づけ

）まず、路地内に足を実際に踏み入れて一見してわかることは、路地内の建築物は部分的に更新が進んでいるが、新しい建築物の中に混じって相当の年輪を重ねた樹木が散在する。すなわち、「植物の更新期間は建築物よりも長い」ということから、地域の「記憶」継承には「植物（本踏査における「路地園芸」）」の存在が重要な要素になると考えられる。

）また、地域固有の資源を見出す際には、少しでもその地域に長く根付いている要素から抽出するのが通例である。その点で、植物（路地園芸）は踏査地域における固有資源の候補になり得る存在であるという仮説を導く。今回踏査地域においては、ブドウやキウイといった品種改良と手入れ時代では「商品」として売れそうな果実をたわわに実らせている家屋（店舗兼用住宅）を発見した。菓子や飲料への加工、または調理用食材に相応しい「地場産品」として「安い原価で（地域内から）仕入れたものに対して、高い付加価値を加えて（地域外へ）売る」ことで、地域住民がその地域で「生活の糧」を得て生き延び、永続的に営まれてきた「記憶」「生活」を継承して住み続ける可能性を示唆している。

）ところで、これからのまちづくりは、少子高齢化・人口減少を鑑みて、すくなくとも「行財政効率の追求と住民自治の育成」「万人に対してモビリティ（移動性）の確保」「生物多様性の確保」という3本柱が必要であると考えられる。

本踏査および路地研における一連の（「遊び」を兼ねた）活動は、そのうち「行財政効率の追求と住民による自治の育成」「生物多様性の確保」に寄与する可能性が見出せる有意義な活動であり、今回の現地踏査は、都内路地の現状把握の一環として、新宿区大久保地区における写真記録を主体に実施したものである。

大久保路地園芸の観察

平成16年9月10日（土）実施 報告者 今井晴彦

住宅地が歌舞伎町からの圧力か、連れ込み宿や飲食店が次第に拡大し、狭い路地空間が複合的な用途混在の場となっており、日本人と外国人が雑多に行きかう独特の地域を形成している。原色豊かな、どぎついというか、目立つというか飲食店の看板が、路地園芸を上回って目に付く。ただ昔ながらの戸建住宅やアパートも生き残っており、意外と豊かな屋敷林があったりもし、落ち着いた雰囲気がところどころで感じられる。やはり、大久保でも今回の商業化した地区では、大久保でも住宅系のところと比べると路地園芸の影は薄い。注目されるのは、路地での建て替えで4m 復員確保のため、敷地の一部が将来の道路用地として工作物等の建築が禁止されているのだが、そこを巧みに活用して花や緑を植栽している事例がいくつか見られた。舗装道路となるより景観的には優れており、逆に6m 道路の端はこのようなつくりに変えることも考えられてよいのではないか。また20坪以下の敷地に3階のミニ戸建を建設しているところが増えているが、その足回りに以外とポットなどを利用した園芸が行われている場合が多い。これは駐車場の確保であったり、建蔽率制限のため道路側に空地をとったりすることが一つの原因でもあるが、心理的に密集人工空間のストレスを和らげるのに大きな効果を発揮している。

路地園芸の様子



大久保探検レポート

路地園芸をテーマとした大久保探検については、以下のような所感を得た。

1. 大久保百人町の園芸文化的な背景と現状

- ）・江戸時代わが国では世界に誇るべき園芸文化が開花していた。その水準は、今日の英国を中心とするヨーロッパの園芸文化と比肩するものであり、大陸の宋の時代に発展した園芸文化とともに、世界の三大園芸文化と称してもよい。
- ）・その江戸に開花した園芸文化の起源は、それまでの貴族などの上層階級の植物愛玩の嗜みに輪をかけて、徳川家康をはじめとする三代にわたる将軍が大の植物好きであったことに始まる。
- ）・将軍や大名などの一部の愛好の対象であった植物は、やがて時を経て、それらの大名の庭に出入りする種樹家(植木屋)の手によって、次第に庶民も手にすることができるようになる。
- ）・園芸が庶民にまで普及するようになると、それらの需要に応えるために、それらを生産する生業を生み出すようになる。
- ）・百人町は、徳川の下級武士たちが、それらの需要に応えるいわば内職としてツツジの栽培を行っていたことで有名である。
- ）・江戸時代には、ツバキに始まり、年代に応じて様々な植物が流行する。ツツジの流行は、1700年代といわれ、一つのブームを生じる。その生産基地の一つが百人町であったわけである。
- ）・現在、この地にツツジ生産の面影はないが、ビルのベランダ緑化にツツジを使用した建物があったことが印象的である。

2. 街の土地利用と植物

- ）・大久保も一歩大通りから路地に入ると様々な植物を目にすることができる。
- ）・しかし、北区や墨田区などに見られる居住を前提とした地区ではなく、商業的な土地利用が混在し、また、一部の建築物は空家となっているため、住宅が大半を占める地区に比較して、日常的に植物を愛玩している様子が乏しい。すなわち、意外にも樹木が多い反面、草花が少なく、日常的に園芸を楽しんでいる様子に欠ける面が有るという印象がある。
- ）・また、一つには東京の中でも外国人の居住が比較的多い地区であり、日本人と生活観が異なっているためかもしれない。
- ）・恐らく、当初住居系の土地利用が占有していた時代は、他の路地と同様に草花を含め、園芸が嗜まれていたと思われるが、次第に街の居住者や土地利用の形態が変化するにつけて、当初の樹木のみが残され、次第に草花が欠けていったのではないかと想定される。
- ）・地区の中で目を引いたのは、以下の三点である。
- ）・街角で見かけた光景であるが、屋上が果樹で埋め尽くされた建築物を発見した。屋上やベランダにブドウ

ウ棚やキウイ棚があり、ブドウには袋まで丁寧にかけてある。その建物の入り口には、コンテナで稲まで栽培されていて、所有者の有用植物へのこだわりを感じさせる。新宿区唯一の水田かもしれない。

- ）・第二は、ラブホテルの緑化状況のおもしろさ。後ろめたさを隠そうという意図か、入り口部分におしゃれな植栽がなされているのは、都市緑化の表彰ものである。都市緑化といえば、住宅地やオフィス街、工業団地などを思い浮かべるが、これはなかなかの都市の工夫である。
- ）・第三は、小泉八雲の居住を記念した公園の設計の面白さ。彼の母国のデザインを取り入れたとされているが、これは日本のコンサルタントの設計に間違いのないような気がした。でも忽然とこんな公園があるのは、路地探検ならではのものであろう。）
- ）・都市緑化といえば、通常は街路樹や公園の整備、あるいは整然とした住宅地やオフィス街の街並みを創造するが、路地園芸は日本人が持つ価値観の一つで有り、日本における都市緑化の原点でも有る。
- ）・都市といえば、整然とした街を生み出すのが仕事であった都市計画の仲間から路地の園芸が注目されているのは、たいへん面白い現象であり、その答えは、今回の探検の中にも見つけられるかもしれない。

）日本最大の繁華街新宿歌舞伎町の北側に位置し、JR 大久保駅・新大久保駅周辺に広がる路地のまち百人町・大久保地区。大久保通りを行き交う人々の会話は、実に多種多様なイントネーションで噂には聞いていたが、それは聞きしにまさるものであった。沿道に並ぶ店も実に多国籍、狭い歩道に看板や商品が並び、人通りの多さも加わって、その喧噪さは実に垂細亜的と言えるのではないか。

）その大久保通りから一步に入ると、そこには大久保通りの喧噪さを忘れるほどの静かな領域が広がっている。戸建て住宅やマンション、人目をはばかりのかファッションホテル、専門学校、協会会館、もちろん駅周辺には飲食店。路地でサッカーをする子供たちがいたり、突然（財）日本相撲連盟なる看板も現れたりする。大久保の路地には、実に多種多様な土地利用がなされている。また、ホテルや専門学校が立地していることからわかるが、大久保のまちは路地の奥にも比較的大きな敷地があり、そのエクステリアに緑が多く配されている。



）園芸は、基本的にはそれを行う人の趣味であるが、それが道路空間に展示された場合は、好むと好まざると街の景観の構成要素となる。私も、浅草の路地で育ち、両隣を含めて園芸好きの路地に暮らした経験を持つが、向島や月島の路地などを訪れたときに、おっ、この路地は手入れが行き届いているねと思ったり、何となく良いねえと思う路地に会うことがある。そういった路地は、もちろん清掃がされていることや建物などがちゃんと手入れされているだけでなく、鉢植えなどがきれいに展示されていたり、樹木の剪定や下草が処理されている路地であったような気がする。

）言ってみれば、建物の手入れや路地を清掃するような人たちは、植木などの手入れもちゃんとしている人たちであり、マナーとプライドを持った、強いて言うならば路地気質を持った人たちではないか。だらしないとかみっともないといった状態を最も嫌う人たちである。実際、我が父と母もそういった人であった。

）今回、初めて園芸という視点でまち歩きをして、緑や花などにほとんど知識のない私としては、見え方から考えてみることにする。

）まず、路地を歩いていると必然的に目に入る園芸であるが、比較的大規模な施設のエクステリア部分、建物の前の縁台、塀やベランダの植栽、壁の蔦、店の前の空地やオープンテラス、そして、道路沿いに並べられた植木鉢などがある。

<比較的大規模な施設のエクステリア部分>

）区の緑化条例等による指導の成果か植栽が設置され、路地の中の貴重な緑化空間となっている。よく手入れされているものが比較的多かったが、手入れしなくて良いようなものが植えられているといった感が否めないものも見られた。

）比較的空間も確保できることから、樹木が植わっていたりボリューム感のある植栽となっている。



<ファッションホテル>

1) 上記の一種として、ファッションホテルの植栽が一つの形式を確立して整備されている。基本的には出入り口付近と道路との緩衝材としての役割を持たせているのか、あるいは利用者の緊張感をほぐすためか、明らかな看板などからファッションホテルという建物であることを隠すことは意図していないと考える。

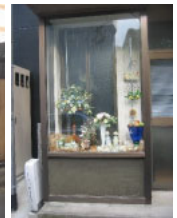
1) 中には、かなりがんばって植栽しているなどと思わせるものも見られる。しかし、なぜファッションホテルはそんなに離れていない場所に出入り口が2カ所設置されているのか、どなたが造詣の深い方がいれば伺いたいと常々思っている。



<建物の前の縁台、塀やベランダの植栽>

1) 個人の建物で行われている園芸であるが、見られることを意識していることが伺われる。

1) 縁台に並べたもの、ベランダの手すりにはわせたものの、塀にはわせたもの等に加え、玄関の両脇にそっと置いたものや店の入り口に下げたハンギングバスケットにはちょっとした粋を感じさせる。また、園芸ではないがショーウィンドーに飾られた造花があったり、果てはぶどう棚という強者まで現れた。ちなみに、このぶどうをおみやげにしたメンバーもいた。



<壁の蔦>

1) 本人が人に見せようと考えているかは別に、壁面に絡まる蔦は、路地のまちの中でのボリュームはかなり大きなものとなる。個人的には緑の巨大な固まりはあまりまちになじまないような気がする。



<店の前の空地やオープンテラス>

1) 大久保駅周辺に多く見られた物件である。エスニック系のレストランが一樣に店の前をオープンテラス状にして、その店の雰囲気に合わせて植木鉢などを配置している。



＜道路沿いに並べられた植木鉢＞

- ）これが最も悩ましい存在であるが、基本的に庭がなく道路沿いあるいは道路上に並べられているのか、縁台などにきちっと並べられているぶんには、路地の景観として評価できるのであるが、植木鉢やプランターがバラバラであったり、果ては発泡スチロールだったり、並べ方も意識していないなど、路地景観を雑然とさせる大きな要因となっているような気がする。
- ）中には駐車場の隅に無許可に発泡スチロールできれいにを並べて、建物管理者から撤去せよとの貼り紙をされているものが見られた。
- ）これらは、しつらえと言うよりは、個の部分がこのスペースにおさまらずにまちの中にはみ出たものと言える。
- ）なお、下町の住宅地に見られるブロック塀上の植木鉢は見られなかった。



- ）次に、塀越しの樹木や屋上庭園、ベランダの鉢植えなどは、積極的に展示しているのではなく、個の部分がまちの中ににじみ出したものである。

＜塀越しの樹木＞

- ）日本の路地園芸の一つの典型と考えられ、庭から個人的に楽しむ面と、「見越しの松」といった塀越しに路地景観を形づくる中間領域的な園芸である。
- ）大久保地区は比較的敷地面積が広く、庭を配した戸建て住宅等も多く、塀越しの樹木のにじみ出しは非常に多く見られた。中でも、シュロの木が何本も見られた。



＜屋上庭園、ベランダの鉢植え＞

- ）完全に個の部分の園芸であるが、ふと見上げた時に目に飛び込んでくる園芸である。
- ）ヨーロッパでは、ベランダの鉢植えを統一して独特の景観をつくり上げているが、日本の集合住宅ではなかなか見られない。今でも根津の辺りの路地に見られるが、路地においては同じような縁台に同じ種類の植木をして独特の景観を形づくっていた。
- ）なお、路地ではないが大久保通り沿いのビルで、テラス部分に大久保のツツジが再生されていた。



）かつての向島や月島の路地は、同じような展示の仕方をしたり、同じ種類の植物を育てたりして、一つの路地景観を形成していたと言える。これは、敷地にゆとりがなく建物建ち方などが同じであることと、園芸がコミュニケーションの重要なツールであったことによると考える。種や苗の交換、肥料や水やりの情報交換など、江戸時代には庶民による新種改良が盛んに行われたという。

）大久保のまちを歩いてみて感じたことは、大久保の園芸はゲリラ的で、連続性や同一性がないと多様な路地園芸であるということである。

）東京北区の十条地区を、園芸を見ながら歩いた時に、一緒に歩いた賀来氏が園芸の手入れをしている住民と話を始めたときに、賀来氏が園芸をほめると最初は何だろうこの人達とはと怪訝そうにしていた住民が照れくさそうに喜んでた。まさに、かつての向島や月島の路地で行われていたコミュニケーションであり、ほめることで園芸を競いあって、お互いにスキルアップしていく。そんな光景を目にしたような気がする。

）かつて浅草にあった私の家には、大きなキンモクセイが植わっており、9月末から10月はじめ頃に花が咲き、路地から表通りまで香りが漂った。私が家の前の路地で遊んでいると、近所の人々が寄ってきて良い香りね～といって、しばらくたたずんでいたのを思い出す。幼い私にとっては、ちょっと誇りに思ったものである。



））小泉八雲公園にて



グリーン食堂にて